

「美男子と煙草」論

——太宰治と生き残りの罪障感

野 中 潤

一、罪障感とうしろめたさ

二〇一一年三月十一日に起きたマグニチュード9.0の巨大地震は、誰もが想定し得なかった規模の大津波を発生させて、東日本の太平洋沿岸、とりわけ三陸沿岸に甚大な被害を与えた。さらに首都圏の電力需要を支える福島第一原子力発電所に深刻なダメージを与えて放射性物質の放出を招き、多くの避難民を生み出すなど、広範囲に数え切れない悲劇を巻き起こし続けている。もちろんここで言う悲劇とは、死亡が確認されたり行方不明になったりするという事態だけを指すわけではない。家族や故郷を喪失した悲哀を抱えたまま不自由な避難所生活を強いられている人びとや、絶望的な惨状の中にあつて復興のための作業に力をふりしぼる人びと、被災地を脱出して新天地での生活を模索する人びとなど、生き残った人びとにもさまざまな辛苦をもたらし続け

ている。地震の激しい揺れや津波に襲われた体験によるPTSDに苦しむ人びともいれば、家族を亡くして自分だけが生き残ってしまったことによる生き残りの罪障感(サバイバーズ・ギルト)に苦しむ人びともいる。この先、数カ月単位どころか、おそらく数年単位の時間が経過しても平時に復することは考えにくく、たとえ数年単位の時間が経過したとしても、生きている限りは人びとの心が完全に癒やされることはないだろう。「東日本大震災」などという単一の名称で呼ぶには、「被災者」一人ひとりの経験の質や深度があまりにも多様で、共感したり理解したりすることさえ困難ではないかと思われる極めて巨大な出来事である。

たとえば、ひとくちに「生き残りの罪障感」と言っても、肉親の住む街が津波に吞まれていくのを高台から呆然と見つめるほかなかったとか、濁流の中で子どもの手を離してしまったとか、漁船で沖合に出ていて何とか助かったとか、向こう三軒両隣の中で自分たちだけが助かったとか、「生き残り」の態様はさまざまである。

また、大津波の難を逃れて生き延びたにもかかわらず、避難所で
の生活による「震災関連死」で亡くなる人も大勢いて、そういう死
に対してなすべがなかったことに対してさらに罪障感を覚えて
苦しむ人びともいるに違いない。あまりの衝撃に感情を鈍磨させ
たり、無力感にむしばまれてしまったりしている人びともいるはず
だ。同一県内にあっても、日常が大きく損なわれず、こうした悲
劇的な死に遭遇することなく無事だった地域もある。そういう地
域の人びとが、東北以外の地域からは「被災地」の人間として遇さ
れながら、深刻な被害を受けた地域の「被災者」とは異なる状況
にある自分を見出し、相対的に恵まれた立場にあることに對する
うしろめたさのようなものを覚えるということもあるかもしれない。
い。

さらに、福島第一原発事故による被災者たちの中にも、共感し
たり理解したりするための共同性を構成することさえ困難なので
はないかと思えるようなさまざまな体験の偏差があることは疑い
ようがない。たとえば二〇キロ圏内とか三〇キロ圏内とかという線
引きや、避難区域、計画的避難区域、緊急時避難準備区域など
の指定によっても、被災地の人びとの経験の質や深度に多様な偏
差が生じているだろう。原発誘致に賛成したか反対したかという
ような有権者としての選択や、原発関連予算による事業や東京
電力への関与の度合いによっても、複雑な加害者意識と被害者意
識が生じているに違いない。

もちろん、原子力発電所の存在なしには成り立たないとわかっ

ていながら豊かな生活を享受してきた過去の自分を振り返る時の
私にも、計画停電や節電による小さな不都合があるとは言っても
相対的には「平時」と言える状況の中で大震災による惨状をテレビ
を通じて視聴している時の私にも、罪障感やうしろめたさのよう
な感情がつきまとっている。募金やボランティア活動などに対する
衝迫が湧き上がってくるのも、そういう感情を相殺するための防
衛機制としての側面があることを否定できないだろう。大震災以
降、「三ツボン」とか「絆」とか「いつしよに」といった言葉で彩られるス
ローガンが巷にあふれているのは、容易には相殺できないこのよう
な罪障感やうしろめたさが、きわめて広範な人びとの心に多様な
偏差を孕みながら巣くつていることの現れなのかもしれない。

このように見てくると、「生き残りの罪障感」という言葉でひと
くくりにするには、あまりにも多様な体験の質があるわけで、そ
ういう振れ幅の中で事態を捉えるために、さしあたり、罪障感と
うしろめたさという二つの言葉を並置しながら論を進めていくこ
とにしよう。

これほどの規模で犠牲者と生存者を作り出し、きわめて多様な
質や深度を持った生き残りの体験と、被害者意識と加害者意識
が交錯するうしろめたさの感情を生起させた出来事として「東日
本大震災」と辛うじて比肩できるのは、「総力戦」として体験され
たかつての戦争だけだろう。もちろん歴史を遡ればこれまでも
大津波や大地震は何度も発生しているわけだが、被災地から遠く
離れた地域の間が、このような形で巨大な悲劇を「目撃」し、体

験として共有したことは一度もなかったはずだ。また、相対的に恵まれた立場にいるということに対してうしろめたさを感じる人びとが、これだけのオーダーで存在できるような社会的条件がととのついているという点においても、未曾有の出来事であると言える。いずれにしても、さまざまな偏差を孕んだ生き残りの罪障感やうしろめたさの感情を、広範な人びとの心に着床させたきわめて巨大な出来事であることは疑いようがない。こうした悲劇のさなかにあつて、「敗戦後」という時空の中から生み出された小説を読み直すことは、これまでとは異なる意味を持つ行為となるはずである。

大地主の息子という立場に対するうしろめたさを抱えつつ左翼運動に関わり、うしろめたさを相殺しようとするかのように芸妓を身請けし、放蕩に放蕩を重ね、情死の生き残りとしての罪障感を抱えながら創作活動が続けた挙げ句に、一家の主として戦争を生き延びた太宰治の小説には、今回の大震災と比肩されるような「敗戦後」のありようがくっきりと影を落としている。そこで、生き残りの罪障感とうしろめたさの中にあつて、「敗戦後」の小説を読み直す試みの手始めに、太宰治の「美男子と煙草」を取り上げ、考察を加えてみることにする。

二、浮浪者と浮浪児のあいだ

『日本小説』の昭和二十三年三月号に発表された太宰治の「美男子と煙草」は、「私は、やっぱり独りで、下等な酒など飲みなが

ら、私のたたかいを、たたかい続けるよりほか無いんです。」という、いかにも太宰治らしい語り口で始まる短編小説である。敗戦後の上野界隈を根城にする浮浪児たちに、「内気でちよつとおしゃれな娘さんに気永に惚れなさい。」と呼びかける結びの言葉や、写真を見た妻が「浮浪者」と「私」を取り違えるというエピソードを記した「附記」にただようユーモアにも、いかにも太宰治の小説らしい秀困気が感じられる。

郡継夫は『美男子と煙草』論⁽¹⁾の中で、「読み終わったあとに残る若干の疑問と少なからぬ感興」について考察を加え、「私」ととつての「地獄世界」が「想像の世界にあつたときの恐ろしさを失つて現実の目前のかたち」となり、「将来に控えている地獄なるものへの不安の消失」をもたらしたという点に「地下道経験」の意味を見出している。そして「地獄なるものへの不安の消失」が小説末尾の明るさを「私」にもたらしたと述べた上で、次のような指摘をしている。

カメラに収まつたあと、「私」は「顔を見合せ」ていた「少年のひとり」の笑いにつられて笑う。このとき「私」のうちに、「下層庶民への落ち」を志向したかつての心の傾きが蘇生していたと推定することは不当ではないだろう。下層へと落ちていく少年たちを見て、遠い昔から下層の者たちに抱いていた親しみの感じが「私」のうちによみがえってきたのである。そしてその思いと少年のひとりの笑いとが結びついて、「私」をある想像へといざなっていく。

あげく「私」は、少年たちも自分も、同じく空を舞っていた天使が翼を失って地上に舞い降りたものであり、いわば天使たちの後裔あるいは後の姿であることを幻視するのである。この幻視のなかで「私」はこの地上の国と天国との重なりあいを感じたのにながいない。

「姥捨（昭和13・10『新潮』）、「俗天使」（昭和15・1『新潮』）、「駆込み訴へ」（昭和15・2『中央公論』）、「東京八景」（昭和16・1『文学界』）など、数多くの小説に論及しながら導き出された郡氏一流の読みである。しかし「大震災後」にあつて「美男子と煙草」を再読するにあつては、この小説が喚起する感興の由来を郡氏とは少し異なる視角から考察してみなければなるまい。そのためにまず考えてみたいのは、上野の地下道の「浮浪者」とはいったい何者であるかということについてである。

雑誌社の企画で浮浪者との写真を撮るために「珍妙なウイスキー」を飲まされて上野の地下道に行った「私」の様子は、次のように描かれている。

私は、地下道へ降りて何も見ずに、ただ真直に歩いて、そうして地下道の出口近くなつて、焼鳥屋の前で、四人の少年が煙草を吸っているのを見掛け、ひどく嫌な気がして近寄り、「煙草は、よし給え。煙草を吸うとかえつておなかが空くものだ。よし給え。焼鳥が喰いたいなら、買ってやる。」

少年たちは、吸い掛けの煙草を素直に捨てました。すべて拾歳前後の、ほんの子供なのです。私は焼鳥屋のおかみに向い、「おい、この子たちに一本ずつ。」
と言ひ、実に、へんな情なさを感じました。

雑誌の記者たちは、「太宰治」と「浮浪者」の対面によつて生じる出来事が、読者の好奇心を満足させる写真や記事につながるかと考えて、わざわざ上野の地下道まで「私」を連れてきたはずである。ところが「私」は、浮浪者たちが屯とんしている地下道を「何も見ずに、ただ真直に歩いて」通り抜けてしまふ。記者から地下道の感想を聞かれた「私」は、「実は、僕なんにも見て来なかつたんです。自分自身の苦しさばかり考えて、ただ真直を見て、地下道を急いで通り抜けただけなんです。」などと答えている。

いったいなぜ「私」は、地下道の「浮浪者」を見なかつたのだろうか。あるいは、見ることができなかったのだろうか。

ここで注目しなくてはならないのは、「私」が焼鳥屋をご馳走した「四人の少年」と、地下道の浮浪者は別の存在であるということだ。「四人の少年」が「すべて拾歳前後の、ほんの子供」であるのに対し、上野の地下道の「浮浪者」はほとんどが成人のはずである。つまり「四人の少年」はあくまでも「浮浪児」であつて、「浮浪者」ではないのだ。一文字の違いなので錯覚を起こしやすが、両者の違いはきわめて重要である。だからこそ、「浮浪者」を直視することができなかつた「私」も、地下道の出口近くにいる「浮浪児」にはまなざ

しを向け、声をかけることができたのである。

敗戦後の上野で浮浪者として地下道をねぐらにしていた人びとの多くは、「引き揚げ者」や「復員兵」だったと思われる。戦争中に外地で苦労を重ねて帰国したにもかかわらず、帰るべき場所を喪失して路頭に迷い、行き着いた場所がターミナル駅の上野であり、その近くの地下道だったというわけである。外地からの資産流入によるインフレを懸念したGHQは、引き揚げ者が所持する通貨や証券などを預託させたため、生活基盤を失い、困窮する人も多かつたと言われている。復員兵の中には、手や足を失うなど、身体的なハンディキャップを背負っていたり、戦地での壮絶な体験によって精神面で深い傷を負っていたりする場合も少なくなかっただろう。まともな暮らしに戻れずに「浮浪者」になり、ときには犯罪に手を染めてしまうことがあっても不思議ではない。戦争中も小説を書き、酒を飲み、家族と暮らしていた太宰治は、まるで物見遊山でもするように雑誌社からの依頼を受けて上野の地下道に行ったわけだが、そこにいたのは、外地で苦労を重ねながら故国に居場所を見つけないで、最底辺の生活にあえぐ人々の群れだったのだ。人並みのデリカシーがあれば、直視できるはずがない。つまり、「私」が「浮浪者」を直視せずに地下道を通り抜けた理由は、一つには戦争を言わば傍観者としてやり過ぎた者として、もう一つは戦争によるものだったのだと言える。外地で苦労を重ねただけではなく「浮浪者」として敗戦後の困窮のさなかにある人々に対して、雑誌の取材を受ける著名人としての特権的な立場にあ

る「私」が持つうしろめたさであると言ってもよい。ところが「浮浪者」を直視することができなかった「私」も、地下道の出口近くにいた「四人の少年」に対してはまなざしを向け、声すらかけている。「煙草を吸っているのを見掛け、ひどく嫌な気がして」とは言っているが、「すべて拾歳前後の、ほんの子供」だという「四人の少年」に、焼き鳥すらご馳走しているのである。

大地主の六男坊としての津島修治が、非合法活動に手を染め、芸妓や女給への恋情に身をゆだねたのも、小作人に象徴される「庶民」に対するうしろめたさからだったと考えることができる。と同時に、芸妓や女給のような社会的弱者に自らの生の不全感を投影し、共感や憐憫のような感情を抱いていたということもあつただろう。「私」と浮浪者たちとの関係にも、同じような感情の振幅を見て取ることができる。写真の中の「私」を妻が浮浪者と誤認するというエピソードが書かれている「附記」を見ればわかるように、戦争を生き残って心身ともに傷を負っている「浮浪者」たちと「私」は、置かれている境遇の違いを越えて、どこか似たところを持つている。したがって、「浮浪者」を直視することは自らの苦しみを通り抜けることでもあり、成人として戦争をくぐり抜けた「私」と「浮浪者」たちが、戦死者たちに対していずれも生き残りの罪障感を感じる立場にあつたということを、「地下道へ降りて何も見ずに、ただ真直に歩いて」通り抜けた理由として指摘することもできる。つまり、大勢いたはずの軍服姿の浮浪者たちを見ることは、傍観者のな場所で「戦争」をやり過ぎたという現実をそのまま反

復するものとして感受されたかもしれないし、生き残りの罪障感を抱える「浮浪者」の姿を見ることが「私」の内に巣くう罪障感を対象化することであつたかもしれないことだ。あとになつて「浮浪者の殆ど全部が、端正な顔立をした美男子ばかり」であるとか、「煙草だけはたいてい吸っていましたね」などと言ひ出し、「浮浪者」をしっかりと見ていたかのような発言をしている「私」は、直視できなかった事実を糊塗しようとしているのだと考えることもできる。そのようにして「浮浪者」を直視することができなかった「私」が、かろうじて眼差しを交わしうる存在として地下道の出口近くに見出したのが、「四人の少年＝浮浪児」だったというわけだ。そうだとすれば、「私」が「浮浪者」の代わりに戦場体験のない「浮浪児」に焼き鳥を御馳走したのは、自分の中にくすぶっている罪障感やうしろめたさを費消しようとしたからだという話になる。

三、上野というトポス

「美男子と煙草」の「私」（太宰治）は、雑誌記者から上野の地下道に屯する浮浪者についての感想を聞かれて、次のように語っている。

「実は、僕なんにも見て来なかつたんです。自分自身の苦しきばかり考えて、ただ真直を見て、地下道を急いで通り抜けただけなんです。でも、君たちが特に僕を選んで地下道を見せた理

由は、判つた。それはね、僕が美男子であるという理由からに違いない。」

みんな大笑いしました。

「いや、冗談じゃない。君たちには気がつかなくつたかね。僕は、真直を見て歩いていても、あの薄暗い隅に寝そべっている浮浪者の殆ど全部が、端正な顔立をした美男子ばかりだということを見つけたんだ。つまり、美男子は地下道生活におちる可能性を多分に持っているということになる。君なんか色が白くて美男子だから、危いぞ、気をつけ給え。僕も、気をつけるがね。」

「端正な顔立」とか「色が白い」という条件が示されているが、浮浪者たちの顔立ちが「美男子」と呼ぶに値するかどうかを、真つ直ぐ前を向いて暗い地下道を通り抜けた「私」が一人一人見極めることは困難だったはずだ。したがつて、「美男子」というのは、「私」の方便として出てきた言葉であるか、外見的な特徴とは別のところに感受された浮浪者たちの特質を表現した言葉だったのではないだろうか。その特質というのがどういふものであるのかを、「散華」（昭和19・3『新若人』）と「未帰還の友に」（昭和21・5『潮流』）という二つの短編小説に登場する「美男子」を参照しながら考えてみよう。

「散華」の「私」（太宰治）は、「三井君」と「三田君」という二人の若者の死について語っている。二人とも作家志望であつたにもかかわらず、志なから命を落とした若者である。「死者は美しく、生

き残った者は醜い」あるいは「美しい者、優れた者は死に、醜い者、劣った者が生き残る」というのが、「散華」の太宰治が死者について語るときの基本的なスタンスだ。一人目の三井君は、文学上の師である「私」から小説を書くよりも先に身体を丈夫にするべきだというアドバイスを受け、それ以来「私」のところに寄りつかなくなり、数ヶ月後に結核と思われる病気で亡くなってしまう。「私」は、「このような時代に、からだが悪くて兵隊にもなれず、病床で息を引きとる若いひとは、あわれである」と述べているが、その一方で三井君の臨終の美しさを誉め称えてもいる。

三井君の臨終の美しさは比類が無い。美しさ、などという無責任なお座なりめいた巧言は、あまり使いたくないのだが、でも、それは実際、美しいのだから仕様がなない。三井君は寝ながら、枕頭のお針仕事をしていらつしやる御母堂を相手に、しずかに世間話をしていた。ふと口を噤んだ。それきりだったのである。(中略)

人間の最高の栄冠は、美しい臨終以外のものではないと思つた。

「太宰治」という作家によって仮構された語りの中に出てくる「臨終の美しさ」という言葉は、「三井君」とは対極的な場所に立つ「死にぞこない」としての「私」の側に、カウンター・パートとしての「醜さ」を割り当てる機能を持つ。あるいは、生きることの醜さを

強烈に意識しているからこそ、「臨終の美しさ」という言葉が要請されているのだと言ひ換えてもよいだろう。

二人目の三田君はアツツ島で「散華」するのだが、「私」は三田君の遺した短い手紙を繰りかえし引用し、「美しい便り」と言つて誉め称えている。

御元氣ですか。

遠い空から御伺いします。

無事、任地に着きました。

大いなる文学のために、

死んで下さい。

自分も死にます、

この戦争のために。

「私」は、このような「美しい便り」を書いた三田君が「一流の詩人の資格を得た」と断言し、「純粹の詩人とは、人間以上のもので、たしかに天使である」とも語っている。手紙を受けとった「私」が、「美男子と煙草」にも出てくる「天使」という言葉を、「純粹の詩人」と等置しているのだ。ただし、三井君と三田君という二人の青年に対して「私」は、「美男子」という言葉を使つてはいない。「私」が「美男子」という言葉を使うのは、どういふわけか三田君の友人である戸石君に対してなのだ。三田君と戸石君はいつも連れだつて「私」のところにやつて来ていたのだが、学生服に坊主頭の三田君が

だいたい黙ってすわっているだけなのに対して、おしやれな装いの戸石君は愚問を連発しては場を盛り上げる快活な男である。

愚問を発する人は、その一座の犠牲になるのを覚悟して、ぶざまの愚問を発し、恐悅がたりして見せているのである。尊い犠牲心の発露なのである、一人づれで来ると、たいはいひとり、みずからすすんで一座の犠牲になるようだ。そうしてその犠牲者は、妙なもので、必ず上座に坐っている。それから、これもきまつたように、美男子である。そうして、きっと、おしやれである。

「美男子」がどのような顔立ちであるかということに関する説明は欠落している。一方で前景化されているのは、「犠牲者」が「美男子」であるという「私」の経験則である。

太宰治が敗戦後に発表した「未帰還の友に」にも、戦争中に発表した「散華」と同じように、徴兵されて戦地におもむいた年少の友人が登場している。「鶴田君」という青年は、東京帝国大学の文科を卒業すると、昭和十七年（一九四二）に故郷の仙台の部隊に入営し、一年後の昭和十八年（一九四三）の早春に戦地に旅立つ。その途上で、在学中に文学上の師と仰いでいた「私」と待ち合わせで別れの盃を酌み交わすのだが、その場所として選ばれるのが上野なのである。東北出身の鶴田君にとって上野は、入営するためにいったん仙台に帰郷する際の出発点であり、戦地に旅立つ際の

重要な中継地点でもある。戦争を生き残ったかどうかは定かではないが、「未帰還の友」である鶴田君も、もしも生還することがあったとすれば、上野駅から故郷の仙台へと戻っていくことになるのだろう。もちろん「美男子と煙草」を書いた青森県出身の太宰治は、上野が地方出身者たちのさまざまな記憶を堆積させた特別な場所であることをよく知っていたはずである。

「美男子と煙草」の浮浪者たちが、いったいどういう理由で上野の地下道に横たわっているのかはわからない。焼け出されて戻るのがないということなのかもしれないし、戦争で手足を失って仕事に就くことができないということなのかもしれない。あるいは、東京大空襲などの震災によつて生きる気力を失うような痛みを受けているのかも知れない。今で言えばPTSDのような状態になつてしまつているのだとも考えられる。いろいろな可能性がある中で、蓋然性が高い事実を一つあげておけば、ねぐらを上野駅の地下道に定めていることから考えて、浮浪者の中に東北出身者が少なからず含まれていただろうということがある。「太宰治」という固有名とともに受容される「美男子と煙草」という小説が、暗黙のうちに敗戦後の東北出身者たちの惨状を後景に置いて成立しているのだとすれば、上野の地下道に横たわつて煙草を吸う「浮浪者」とは、「太宰治」にとつてあり得べき自分自身の姿を開示すると同時に、敗戦後の時空を今このようにして生きている自分を告発するといふような複雑な様態を持つ存在であることになるだろう。

四、美男子であるということ

「未帰還の友に」という小説の魅力は、東京帝国大学を出たエリートの鶴田君と菊屋というおでん屋の娘であるマサちゃんとの間に生じる小さなロマンスと、その小さなロマンスが戦争によって壊されていくさまを「僕」が見つめていくという構造の中にある。アルクールが不足するご時世の中で酒を飲むためにおでん屋にコネを作ろうとして鶴田君を利用したという背景があるので、二人の悲恋に立ちあう「僕」の心の中に一種の罪障感がわだかまっていることも見逃せない。それを「未帰還の友に」と題した手記の形で、もはやこの世の人ではないかもしれない鶴田君に向けて語りかけるというのが、この小説の趣向である。

「未帰還の友」である鶴田君について、「僕」はこんな風に語っている。

「…それでね、僕の友人でいま東京の帝大の文科にはいつている鶴田君、と言つてもおじさんにはわからないだろうが、ほら、僕がいつも引っぱつて来る大学生の中で一ばん背が高くて色の白い、羽左衛門に似た（別に僕は君が羽左衛門にも誰にも似ているとは思わないが、美男子という事を強調するために、おじさんの知つていそうな美男の典型人の名前を挙げてみただけである）そんなに酒を飲まない（その実、僕のところへ来る大学生のうちで君が一ばんの大酒飲みであった）おとなしそうな青年が、そ

の鶴田君なんだがね、あれは仙台の人でね、少し言葉に仙台なまりがあるからあまり女には好かれないようだけれど、まあ、かえつてそのほうがいい。」

ヒロインのマサちゃんの父親であるおでん屋のご主人に、「僕」が鶴田君を紹介する場面である。「僕がいつも引っぱつて来る大学生の中で一ばん背が高くて色の白い、羽左衛門に似た…そんなに酒を飲まない…おとなしそうな青年」とも述べている。「羽左衛門」というのは、歌舞伎役者の十五代目市村羽左衛門のことで、その美貌から「いい男」の代名詞とされた人物だ。里見弾の『羽左衛門伝説』（毎日新聞社・一九五五年刊）によつて、フランス系アメリカ人と日本人女性のハーフであることが明らかにされたことでも知られている。そして「僕」が「美男子」の外見的な特徴として強調しているのは、「背が高い」とことと「色が白い」ことである。

まず「背が高い」という特徴について言えば、旧日本軍の兵士の中にあつて外国人のように背が高いということは、規格外の存在であつたことを意味する。外套、外被、防寒帽、軍靴、鉄兜などを含むさまざまな軍装品のことを考えても、敷布や毛布、寝袋などを利用する際のことを考えても、当時の日本人の平均的な体格身長一六〇センチ程度）よりも大きい鶴田君のような「美男子」は、兵士としては規格外の面倒な存在だつたのではないかと推測できる。下士官だつたらしい鶴田君が、背が高いということだけで鉄拳制裁を受けるというような可能性がどれくらいあるのかははわか

らないが、さまざまな場面で不自由を強いられたであろうという
ことは想像に難くない。言い換えれば、「背が高い」ということで、
出来合いの社会に適合しない自分を常に意識していたはずなので
ある。青森県の津軽地方では三男以降の「余計者」の兄弟に対
して「オズカス」という差別的な呼称を使うことはよく知られてい
るが、身長が一七〇センチを超えていたと言われている六男坊の
津島修治（太宰治）の「オズカス」意識は、「背が高い」ということ
によつてさらに強められていたかもしれない（2）。

次に、「色が白い」という特徴について言えば、真つ先に浮かんで
くるのは、「大地主の息子で文弱な少年」としての津島修治のイメ
ージである。青森県内有数の大地主である津島源右衛門の六男
として生まれた津島修治（太宰治）は、弘前高校在学中に左翼運
動に関わっている。地主であるという出自に対する負い目が、津島
修治を左翼運動に駆り立て、ついには自殺未遂を引き起こす原因
になったとも言われている。農業人口がきわめて多かつた戦前、土
地を持たない農家の子どもたちは、十分な教育も受けられないま
ま、年少の頃から農作業を手伝わされた。したがつて、貧しい農家
の息子で羽左衛門のように「色が白い」という美男子の条件を満た
せる十代の少年は、ほとんどいなかつたはずだ。「色が白い」とい
うことはそれだけで、津島修治のような人間にとつては、自らの恵ま
れた境遇のあかしである。もちろんそれはそのまま、恵まれた境遇
にあることへのうしろめたさの意識や、そういう自分の外見に対す
るこだわりにつながっていたはずなのである。

五、浮浪児という天使

「美男子と煙草」というきわめて短い小説の導入部に、一見する
と物語の本筋とは関係ないように見える「古いものとのたたかい」
についての話が置かれている。

古い者は、意地が悪い。何のかのと、陳腐きわまる文学論だ
か、芸術論だか、恥ずかしげも無く並べやがつて、以て新しい必
死の発芽を踏みにじり、しかも、その自分の罪惡に一向お気づ
きになつておらない様子なだから、恐れいります。押せども、
ひけども、動きやしません。ただもう、命が惜しくて、金が惜し
くて、そうして、出世して妻子をよるこぼせたくて、そのため
徒党を組んで、やたらと仲間ぼめして、所謂一致団結して孤影
の者をいじめます。

私は負けそうになりました。

このあと、三人の「年寄りの文学者」にいじめられた夜の出来事
を語り、帰宅後にくやし泣きをしたことを回想した上で、「ああ、
生きて行くという事は、いやな事だ。殊にも、男は、つらくて、哀
しいものだ。とにかく、何でもたつたかつて、そうして、勝たなければ
ならぬのですから。」という言葉で導入部は締めくくられている。
こうした叙述を支えているのは、「古い者／新しい者」「年長／年

少「徒党／孤影」「生き残る者／滅び行く者」「罪惡／無垢」「醜い／美しい」「勝つ／負ける」というような二項対立の第一項に先輩作家たちを位置づけ、第二項の側に自分を配置しようとする「私」のモチーフである。と同時に、第二項に自分を配置しようとするモチーフの背後には、第一項の側にあるという現実を否認しようとする衝動が見え隠れしている。しかも「私」の中にあるそのような衝動は、まるで強い愛着が一瞬にして強い憎しみに変わるように、ちよつとしたきつかけさえあれば、発露する方向をまったく反対の方向に変えてしまうかもしれないものとしても描かれている。「年寄りの文学者」にいじめられた夜から数日後に出版社の若い記者が訪ねてきて、「上野の浮浪者を見に行きませんか？」と誘いに来たときに、「参りませぬ。」と答えた自分の心理を、「泣きべその気持の時に、かえつて反射的に相手に立ち向かう性癖」と「私」が語っているのは、そのような衝動のことを指している。つまり、滅び行く者としての美しさを持つ孤影の存在でありたいと願いながらも、現実には醜悪さの中に生きるしかないのかもしれないという恐れを抱き、第一項の側に自分がいることを意識せざるを得ない場所に、言わば自傷行為のようにして身を躍らせたのが、「参ります」と答えたときの「私」の心理であつたということになる。これは、先輩作家たちと「私」との関係性が、そのまま「私」と浮浪者たちとの関係性と重なることを意味する。戦場に駆り出された世代に対して相対的には「年長者」であり、「生き残る者」であり、「勝者」であり、「醜い者」でもあるところの「私」は、出版ジ

ヤーナリズムという「徒党を組む者」の側から地下道に横たわる「孤影の者」を睥睨する立場にいる。見方を変えれば、浮浪者は、生き残りによる罪障感やうしろめたさを感じるという点で自分と同様の存在であると言えるのだが、その一方で自分に罪障感やうしろめたさを感じさせる戦争の死者を（代行）表象する存在でもあるのだ。そのような存在である浮浪者を前にした時に「私」が最後に見出したのは、「生き残る者」でありながら「年少」であるがゆえに「罪惡」に汚れることなく「無垢」なままで生きている「美しい」浮浪児である。

浮浪者とは異なり浮浪児は、戦争に対する有罪性や戦争の死者に対する有責性をもたず、罪障感やうしろめたさを感じる必然性のない無垢な存在として「私」の欲望の対象になつている。そういう意味合いにおいて、「私」の負の感情を相殺する存在として召喚されているのが、（浮浪児＝天使）である。あるいは、罪障感やうしろめたさの淵源たる「過去」とは別の、あり得べき未来を（代行）表象する存在であると言つてもよい。何も見ずに真っ直ぐに地下道を歩いて出口近くの焼鳥屋の前で四人の少年と遭遇したとき、彼らが煙草を吸っているのを見かけてひどく嫌な気分になり、「煙草は、よし給え」と話しかけたのは、地下道と煙草を吸っていた「浮浪者」たちとは異なる存在として「浮浪児」たちを欲望していることの現れだろう。醜悪な生者の代表たる年寄りの文学者たちに対した時の「私」は、相対的に「美男子」の側に立っているとは言え、「浮浪者」たちを前にすれば醜悪な生者としての自分を意識

せざるを得ない。一方で「私」は、「浮浪者」とともに戦争の死者たちに対する生き残りとしての有責性を伏在させたまま、無垢で美しいものとして救済される希望を、「浮浪者」ならぬ「浮浪児」という存在に仮託している。戦争の死者に対しては浮浪者と同じでありながら浮浪者とは別個の存在である「私」が、浮浪児とは別個の存在であるにも関わらず浮浪児と同じ側に立つ存在であるかのようふるまうことの中には、敗戦後という時空でさまざまな偏差を抱えながら加害者意識と被害者意識の錯綜する中に生きていた敗戦後の人びとの心理的なねじれが、ねじれたままに表象されているのである。

註

(1) 『現代文学史研究』第2集(二〇〇四年六月)。

(2) たとえばエッセイ「男女川と羽左衛門」(一九四六年十一月・新紀元社刊『薄明』所収)で、背が高いことを恥じる横綱男女川登三に共感する心境を書き留めている。

(のなか・じゅん)

二〇一一年度分の会費について

本誌九十八ページの「編集後記」に記された通り、『現代文学研究』は本集をもって終刊となります。したがって、今年度分(二〇一一年度分)の会費徴収は致しません。本集発行にかかる費用に関しては、執筆者による分担金と前年度繰越金から支出します。ご了承ください。

なお、前年度までの会費について未納分がある方は、別途請求を致しますので、よろしくお願い申し上げます。

現代文学史研究所事務局
〒215-0027 川崎市麻生区岡上二二五―四
電話&FAX 〇四四(九八六)三七六〇
e-mail: gendaijungakushi@yahoo.co.jp
振替 〇〇二八〇〇―九二七二八